

森鷗外初期の文体意識に関する覚書 (一)

小 倉 齊

森鷗外が四年間のドイツ留学を終え日本に帰国したのは、明治二十一年(一八八八)年九月八日のことであった。当時の文学界は、改良運動の一環としての言文一致運動を背景に、伝統的な漢文直訳体や和文

体の枠組みを取り払い文体の口語化を目指す動きが新しい情況として形成されつつあった。例えば、活版非売本『我楽多文庫』第九集(明一九・一一)より連載され始めた山田美妙の「嘲戒小説天狗」中の「段々に夜もふけて四辺は全く静になり前の庭にある滝の音がゴウ／＼と響くより外には何も聞えず、シーンと淋しく成て来た」という一文などにその一端を見ることが出来るだろうし、坪内逍遙の「此処やかしこ」(『絵入朝野新聞』明二〇・三〇五)、二葉亭四迷の『浮雲』第一篇(明二〇・六)同第二篇(明二二・二二)、山田美妙の「武蔵野」(『読売新聞』明二二・一一〇)などに言文一致運動の高まりの証を見いだすことも出来るだろう。さらに、二葉亭四迷がツルゲーネフの「獵人日記」中の一篇を訳した「あひゞき」(『国民之友』明二二・七〇八)や山田美妙の短編小説集『夏木立』(明二二・八)を、近代

文章史上画期的な成果として挙げることも出来るだろう。そしてまさに鷗外は、こうした言文一致運動の高まり、ブームの中に帰ってきたのである。

ところでこうした情況の中で鷗外はどのような姿勢を示したのだろうか。鷗外は帰国の翌年つまり明治二十二年から文学活動を開始するが、とりあえず明治二十二年中の鷗外の活動について眺めるならば、特筆すべき事柄としてはまず第一に新声社の共訳によった「於母影」の発表(八月)、第二にその原稿料をもとにしての『志がらみ草紙』の創刊(十月)とそこを主な発表舞台として展開された啓蒙的評論活動、第三に同じく啓蒙的意図で展開された翻訳活動が挙げられる。そしてここで当時の文学情況に対する鷗外の意識に焦点を絞るならば、西欧文学を翻訳するに当たって鷗外はそのほとんどを口語体で試みているという事実注目せざるを得ない。ちなみに明治二十二年中あるいは明治二十二年を起点として発表された鷗外の翻訳作品を口語文体と文語文体とに分けてリスト・アップすると以下のようなことになる。

△口語文体△

- 「音調高洋箏一曲」(カルデロン原作、三木竹二と共訳、『読売新聞』明二二・一・五〜二・一四)
 「緑葉の歎」(ドウデー原作、三木竹二と共訳、『読売新聞』明二二・二・二二)
 「玉を懐いて罪あり」(ホフマン原作、三木竹二と共訳、『読売新聞』明二二・三・五〜七・二二)
 「新世界の浦島」(アルヴィング原作、『少年園』明二二・五・五〜八)
 「洪水」(ハート原作、『志がらみ草紙』明二二・一〇〜明三三・三)
 「戯曲折薔薇名」(エミリヤ、ガロツチー) (レツシング原作、三木竹二と共訳、『志がらみ草紙』明二二・一〇〜明二五・八)
 「伝奇トオニイ」(キヨルネル原作、三木竹二と共訳、『読売新聞』明二二・一・二五〜二二・三三)

△文語文体△

- 「戦僧」(ドオデエ原作、『少年園』明二二・三三)
 「於母影」(新声社共訳、『国民之友』明二二・八)
 「瑞西館に歌を聞く」(トルストイ原作、『読売新聞』明二二・一一・六〜一一・二九)

すでに明らかなように、鷗外は明治二十二年に発表した翻訳十篇のうち実に七篇までに口語文体を用いている。山田美妙は八前に美妙齋主人の言文一致体の流行に協力の実の有つたのは二葉亭氏、嵯峨の屋氏でした。後の紅葉山人の西鶴体の流行に合同の力をくはへたのは櫻庭篁村氏、露伴氏でした。外に森鷗外氏はむしろ言文一致体のために

腕を添へました。△と述べ、鷗外を言文一致運動の担い手の一人として位置づけているが、明治二十二年中の翻訳における口語文体の多用という事実を見る限り、美妙の捉え方は的を得ており、鷗外は文体の口語化の動きに敏感に反応を示していたと言わざるを得ない。そしてそれは、翻訳における鷗外の口語文体の実際を見ることで、より明らかにになる。

ヤット今日始めて目を見開いて驚いた驚いた筈だまだ見た事のな
 い大きな室の窓には白い布が懸つて居つて雲の間から折々漏れて
 来る日の光を最一度遮つて居つた窓の前には鬼の様な大きな樹木
 が緑の枝を腕の様に延ばして居つたまた寢床の側に居るのは物静
 な看病婦で着物を見れば病院で介抱をする尼とは違ひ顔に網もか
 けず数珠も持たぬその交りに襟に銀の十字形の飾りをかけて居つ
 て俯いた所を見れば髪の毛を二ツに分けて編んだのが長く腰まで
 垂れて居つた (「緑葉の歎」)

マゲダレーンの家の奴婢が心配したのも無理ではない其頃巴里に
 怪しい死様をするものがあるので閩府の人心が恟々として居た何
 物の仕業か知れぬが金銀や珠玉の飾を持ったものは何時となく盗
 み取られ又た飾を持つて日暮から後に歩行くものは多く殺された
 此難に逢ふて飾は取られたが不思議と命を拾つた人の話に何心な
 く道を行くと突然に頭を強く打たれ其儘仆れて気を失ひ暫くして
 心付いて見れば遙か離れた町に居て飾はなかつたと……家中で

殺されたものも検屍の時に見ると皆んな唯ツた一つの刺創が胸に
 在る解剖して見れば心臓が差し貫ぬかれて居る何にせよ畏ろしい
 手練と見える (「玉を懐いて罪あり」)

すでに山本正秀氏が、△明治二二年度の鷗外の言文一致体での訳業
 は、翻訳文章史上二葉亭の全くの同調者であり、その後にも続く最有力
 者の観が深かった。▽と評しているが、引用部分は鷗外後期の口語文
 体の持つ簡潔にしてなおかつ緻密精確な特長の片鱗を示しているばかり
 でなく、二葉亭の「あひゞき」や「めぐりあひ」(『都の花』明二・
 一〇)明二二・一)の文体との近似が見られる点で注目すべきであら
 う。例えば、「あひゞき」の冒頭部分△秋九月中旬といふころ、一日
 自分がさる樺の林の中に座してゐたことが有つた。今朝から小雨が降
 りそゞぎ、その晴れ間にはおり／＼生ま燦かな日かけも射して、まこ
 とに気まぐれな空ら合ひ。あわ／＼しい白ら雲が空ら一面に棚引くか
 と思ふと、フトまたあちこち瞬間雲切れがして、無理に押し分けた
 やうな雲間から澄みて伶俐し気に見える人の眼の如くに朗かに晴れた
 蒼空がのぞかれた。▽と読み較べてみれば、鷗外が二葉亭の翻訳文体
 をかなり強く意識していたのではないかと想像されるのである。坪内
 逍遙は言文一致運動の担い手達を美妙を祖とする派と思索・柳浪・漣
 らの派とに分けた後、△二葉亭主人と鷗外漁史ハ前の二派とも異りて
 又同じからず而して其門徒に乏し▽と述べているが、二葉亭と鷗外の
 中に微妙な相違を認めながらも当時の言文一致運動において異質な立
 場から文体の口語化を進めた存在として二人を位置づけている点が興

味深い。もちろん、後年鷗外が二葉亭の翻訳について△翻訳がえらい
 といふことだ。私は別段にえらいとも思はない。あれは当然だと思ふ。
 翻訳といふものはあんな風でなくてはならないのだ。▽と述べている
 ことから判断するならば、翻訳であるがゆえに生じた近似性というこ
 とになるのかも知れない。しかし、滞独中に本来的な意味での言文一
 致である欧文を体得し自負心を抱いて帰って来た鷗外が口語体による
 翻訳を試みるに際し、洋行経験のない二葉亭四迷によって欧文脈に精
 通したと思われるほどの精妙な翻訳がすでに示されていたことは大き
 な衝撃であったに違いない。明治二十二年中に精力的に発表された鷗
 外の翻訳作品とそこで用いられた口語文体には、二葉亭への対抗意識
 が現れていると見てもよさそうである。

ところで、鷗外の口語文体の試みは、翻訳のみにとどまらない。三
 木竹二との合作戯曲「女歌舞伎操一舞」(『読売新聞』明二二・一一・
 五)もほぼ口語体で書かれているし、明治二十二年中の『読売新聞』
 寄書欄に掲載された「裸で行けや」(一一・一二)、「修行がしたい」(三・
 一三)、「池袋清風君に一言す」(四・七)、「巖々親爺へ」(四・一七)、「
 『文学上の創造権』(一六・二七)、「時事新報は医者何物たるを知らず」
 (七・三)、「寄か奇でないか」(一一・一一)の投書文や、『国民之友』
 掲載の評論「独逸文学の隆運」なども、「です・ます」調の談話体や
 軽妙な戯文調で書かれている。以下に例としていくつか引用しておく。

書中の裸蝴蝶(一)……オヤ／＼瑣吉ツアンかおえいチャンな
 ら「思ひしことよ、といふ処だ……ダガ西洋で千年も二千年も続

いた喧嘩が又た此処で持上ッては大変だ……武チャンも武チャンだ「裸但しミユルテの葉にて例の処は隠れて見えず」とか何とか云ッてコンナ人に安心させれば好いに……（「裸で行けや」）

イヤ実に感服しました！ 忍月さんより、先づ私しが御教授が受けたい、西洋の詩を日本の詩に訳して、律呂に合はせろとは！

（「修行がしたい」）

今の日本は、独逸文学の隆運が殆ど其極度に達した時です。夫れに読売新聞のある投書家は、態々「独逸文学の不運」といふ題を担ぎ出して、独逸の詩を翻訳する人を攻撃しました。此巖々法史といふ人は、兎角私しと反対の位置に立ちたがる、裸蝴蝶以来、お馴染の学者ですが、何うも議論には受け取りにくい所が多くなります。

（「独逸文学の隆運」）

ここに示した例は、口語体とはいっても、翻訳で用いられた口語体とは明らかに異なり、芸術の無理解に対する皮肉・反論であることや新聞への投書文であることを十分に意識した軽妙自在な口調が選ばれている。おそらくこの時期の鷗外には、発表の場所や文章の内容に応じて文体あるいは文調を自在に操ろうとする意識が強く働いていたはずである。そしてこうした意識は、口語文体の試みとしてのみ発揮されたわけではなく、文学界の混沌とした流れに柵をかけるという意図で創刊された『志がらみ草紙』に次々と発表された評論の文体として

漢文直訳体を選び取るという形でも発揮されたのである。

明治二十二年に示された場面に応じて自在に文体を使い分けて行くとする姿勢の裏には、如何なる文体も駆使できるという自負心と新婦朝者としての啓蒙意識が潜んでいたと考えられるが、明治二十三年に入ると事情は一変し、鷗外は口語文体の試みから急速に離れて行く。最初の小説「舞姫」（『国民之友』明二三・一）をいわゆる雅文体で発表した鷗外は、小説においては少なくとも「半日」（『スバル』明四二・三）までは口語文体を試みていないし、翻訳においては明治二十二年中あれほど口語文体を試みたにもかかわらず「埋木」（『志がらみ草紙』明二三・四）明二四・五）以降は完全に雅文体に転換している。さらに『志がらみ草紙』で本格化する評論活動においても、漢文直訳体が重きを成して行くし、先に挙げた「修行がしたい」「独逸文学の隆運」「池袋清風君に一言す」「巖々親爺へ」「文学上の創造権」が単行本『月草』（明二九・一二）春陽堂）に収められる際、改題・修訂され、文体も漢文直訳体に統一された事実もある。

鷗外はなぜ口語文体を放棄し、小説・翻訳での雅文体の創出、評論での漢文直訳体の駆使の方向を目指したのか。はたして△鷗外のこの急変は、明治二二年後半からの文壇の風潮としての、和漢洋調和の文章彫琢への傾斜と落合直文らの保守的国文改良運動の感化を強く蒙ったため⁷であったのかどうか。鷗外の文体論とも言うべき「言文論」（『志がらみ草紙』明二三・四）や、鷗外に影響を及ぼしたとされる落合直文の「文章の誤謬」（皇典講究所講演11、明二二・七・一五）、直文が和文調を用いて新国文のモデルを示そうとした作品「悲哀」（『志

がらみ草紙』明二二・一〇)の検討から始めることで、答が得られそうである。

注(1) 「明治廿二年度の日本文学世界」(『以良都女』明三二・一二)

(2) 『言文一致運動の歴史論考 続編』(昭五六・二 桜楓社)

(3) 「明治廿二年度文学界(重に小説界)の風潮(続)」(『読売新聞』明三三・一・一五)

(4) 坪内逍遙・内田魯庵編輯『二葉亭四迷』(明四二・八 易風社)所収「長谷川辰之助」

(5) 『志がらみ草紙』の本領を論ず(『志がらみ草紙』明二二・一〇)の冒頭部(西学の東漸するや初めその物を伝へてその心を伝へず学は則ち格物窮理、術は則ち方技兵法、世を挙げて西人の機智の民たるを知て、その徳義の民たるを知らず)は典型的である。

(6) 一例を示すならば、「修行がしたい」は「平仄に就きて」と改題され、本文中で引用した冒頭部分が(古本山人は洋詩を国語に訳して平仄を存ぜよと、忍月居士に求めたり。この平仄(古本山人は律呂といふ)はいかにして出さるべきものなるか。Vのように修訂されている)。

(7) 山本正秀『近代文体発生の史的研究』(昭四〇・七 岩波書店)